

英国功利主義の日本への導入 についての一考察

山田 孝雄

1 序 言 日本人の国民性は摂揚性である

私は日本の国民性の世界に比類のない特異性をもっているものと確信している。これは決して私だけでなく日本国民が皆そう思っているものと信じている。

それは、他国の文化・文明を迅速に取り入れ、更にそれを高度なものとし、日本化するという国民性である。

私共が、小学校の生徒であった頃、先生から日本人は何んにも発明したものはない、ただ水車と人力車だけだと教わって、そのように信じていた。事実、今日に到っても、その通りである。

文明社会において用いられている多くの文化財が西洋諸国の発明にかかっているが、然し日本人は常に外国の文物を取り入れてそれを日本化し、高度化して輸入した国へ逆輸入することが多い。

文明国にとって最も必要なものは、文字である。漢字は中国から輸入されたものであるが、日本人はこれをもととして片かな、平がなをつくり、これによって日本文化を保持発展するに大いに役立たせている。例えば、加は一片をとって㊦とし、くずして㊧とし、呂の一片をとって㊨とし、くずして㊩とした。これは日本語を表現するのに極めて便利である。

しかも、漢字もそのまま用いている。我々の書く文章で半分は漢字をそのまま用いている。漢字を用いなかったら我々日本人の思想は全く貧弱になるにちがいない。

更に又漢字の使用においても賢明なものがある。明治になって西洋文明の怒濤の如く入り来った時、急速にこれを日本語に訳した。しかし、それは凡て漢字をあてたのである。例えば、幸福、権利、義務、観念（仏教語）社会、百貨店、経済学等々である。

これらの多くは中国へ逆輸入されている。経済学の如きは中国でこれは日本でつくった言葉だから資生学と改めようとしたが結局失敗し、今ではやはり日本と同じ経済学の名称を用いている。

さて、鉄鋼材による造船術は英国から学んだものであろうが、その技術は今や世界一であり、英国が逆に日本に船舶の注文をしている状態である。

明治5年に、英国の技師が来て東京横浜間に敷設した鉄道は今や時速200マイルの新幹線となり、世界の人々の注目をあびている。

自動車、テレビ、ラジオ、時計、コンピューター等々日本の発明は一つもないが、然しその質と生産量は世界の国々の中でトップ・クラスに立っていることは疑いない。我々は欧州へ旅行して日本の自動車、時計のネオン・サインを見ることは珍しいことではない。

物質文明だけではない。精神文化においても同様である。今日、西洋で唱えられる哲学思想は逸速く日本の学者に取り上げられる。かつて現象学が日本で一時流行した頃、ある小学校の先生が「国語の現象学的研究」と題して、研究発表したことがあったが、その内容はともかく、このように日本のすみずみまで外国の思想が浸透することは世界何れの国にもない事象である。

日本は古くより、儒教、仏教、キリスト教等世界の精神文化を取り入れてそれを独特な方法で維持し発展させている。これは何れの国にも見られない現象である。

私はこのように他国の文化を取り入れて、しかもそれを高める日本国民性を「摂揚性」と名づけている。

明治40年に東大教授の芳賀矢一博士が「国民性十論」（注1）を世に出し有名であった。十論とは、1.忠君愛国、2.祖先を崇び、家名を重んず、3.現世的、实际的、4.草木を愛し、自然を喜ぶ、5.楽天洒落、6.淡泊瀟洒、7.繊麗繊巧、8.清浄潔白、9.礼節作法、10.温和寛恕である。この中には過去にそうであっても現在は世相の変化で消滅したものもあり、また、現想として、かくありたいとして論じたように思われるものもある。しかるに摂揚性は現実に日本に存在している事実であるから、空想でも希望でもなく、少なくとも20世紀後半の日本国民の性質を明示したものである。

さて、以上述べた如く日本人は賢明で、古来外国文化文明を吸収するに敏であり大いに尊敬すべきことであるが、それにしても私の最も遺憾に思うことは先覚者西周等によって切角日本に取り入れられた英国の伝統的倫理思想である Utilitarianism がまげられて今日まで伝わり、なお、依然とし「功利主義」と呼ばれていることである。これは正しくは「公利主義」又は「公福主義」と訳するのが妥当である。

私は、本論文において、なぜ、また誰によってそのような曲解されるようになったかを書きしるして御批判をおおぎたいと思うのである。

II ユーティリタリアニズムの意味するもの

Utilitarianismは「功利主義」と訳するのが定説である。しかし、これ程誤った訳は珍しいことでもあるが、また、その日本人に及ぼす影響も大きいので私は敢てここに一文を草し過ちをただそうとするのである。

注1. 富山房出版

前述した如く日本人は物質文明を取り入れることには極めて敏である。物質的なものは何人にも明瞭に認識されるので正・否・善・悪の判断がすぐできるが精神文化は抽象的で何人にも直ちに理解されるものでないことが明らかで、したがって外国から導入された場合、その仲立ちをした者の誤解により曲げて伝えられることもあり、また、言葉の違いによって訳語が原語と甚しく意味を異にする場合もある。

仏教は印度に起ったが中国語に訳されそれが日本に伝わり、凡そ印度仏教と異った日本仏教が生れた。中国の儒教においてもしかりである。例えば、中国では人倫の根本は「孝」であり、「忠」はこれにつぐものとされたが、日本では終戦までは「忠」が第一で、忠孝一致などといわれ、「忠」をもって国民道徳の根本としたことは周知の通りである。

さて、私が大学生に倫理の試験問題として「『功利主義』について述べよ」と出すと、講義に出ていない学生の答は必ず「功利主義とは個人主義、利己主義で、よろしくない思想である。」と書く。

これは全然間違いといえないが、少くとも倫理学を学んだ学生の答としては、倫理学以前の答であって零点に近い。世間一般ではそのように考えている。「功利」という言葉は中国では古く荀子によって用いられたもので、その意味では「自分の^〇功^〇名^〇利益」を第一とするという意味で世間一般にはそのように理解されている。

しかし、倫理学を学んだ学生であれば、功利主義とはUtilitarianismの訳で、それは the greatest happiness of the greatest number を意味するものであり、「最大多数の最大幸福を正邪善悪の基準とし、その達成を行為の目的または人生の目的とする主義である。」というのが最も正しい答である。

さて、そういえば極めて明瞭な説のように思われるが、さらに突込んで検討する場合多くの問題が含まれている。第一、最大多数とは何を指すかである。多くの日本人は、ベンサム Jeremy Bentham 1748 - 1832 の意味していることを知らずに、加藤弘之（初代東京大学総長）の如く、これは漠然とした言葉で行為の規準とはならないなどという者もあるが、ベンサムの弟子共の解釈では「人類」を意味するものであるとされている。

事実、ベンサムが「最大多数の最大幸福」という^〇聖^〇句（この句は当時欧州各地で叫ばれたスローガンであったが、ベンサムを崇拜する弟子共はかく呼んだ）を発見した時、彼は次の如く考えた「この著名な公式は、自分にとっては唯一の正邪の標準を発見したと思われた。これによって『政府の改善と人類の運命の改良』improvement in government and the melioration of the lot of mankind を行おうと胸中既に燈っていた熱情の温かさに一段と光を加えたのであった。……」（注2）と老後に弟子に語っている。これか

注2. Atkinson s Bentham P.20

E.U.Stephen's English utilitarians, Vol.1 P.178

Works of Jeremy Bentham by John Bowring, X.P.79

ベンサム功利説の研究 山田孝雄著大明堂 67頁参照

ら推してみても彼は当時既に人類を幸福に導きたいという情念にもえていたことが知られる。「私は功利主義が好きである」と言明した加藤弘之も、ベンサムの主著An introduction to the principles of morals and legislation（道徳及び立法の原理序論）を読んだ範囲内で彼の思想を理解していたので前述のような誤りをしたのである。18世紀からようやく世界の人々が「人類」を対象として物事を考えるようになりはじめたが、しかし、当時はまだ斬新な思想であったように思われる。

今日では、「日本国憲法」や「教育基本法」にもあるように「世界の平和と人類の福祉（幸福と同じ）」に貢献することが日本国民の理想とすることで、ベンサムが今から凡そ180年前に22才の頃、決意したのと同じ思想である。

ベンサムは然らばなぜ「最大多数」と漠然と言ったか。それは極めて实际的で空想家でない彼は、現実に行為する場合、自分の力で実現できる以上のことは、人はなし得ないし、また、望むことができないと考えたからである。一般の市民であれば、「最大の幸福」といっても、自己の家庭、友人、隣人、会社につとめているなら会社全体の発展幸福を増進するより以上のことができないのは理の当然である。然し、政治家となって一国の政治に関与した場合には国民全体の幸福を第一に考えるべきであり、世界の中の大国といわれる国の大統領や首相であるなら人類の幸福ということを念頭において政治をなすべきであろう。しかるに一国の首相が国民の幸福を後にして自己の地位の確保に熱中したり、自党の利益のみを考えて国民の幸福を後にするならば、これは誠にベンサムの原理に反するし、当然非難されるべきである。同様に、大国とされる国の首相が理不尽な方法で他国の土地を領有し、軍事施設をして弱小国をおびやかしたり、また、小国同士の紛争を手をこまぬいて傍観する等もベンサムの原理に反するものである。さればと云って力のない小国が仲に入り却って紛争を助長するなども好ましくない。かく考えると「最大多数」といった彼の言には深い意味があったもので漠然としていると非難した者が実はベンサムの真意を解せなかったといつてよい。

次に「幸福」の問題であるが、これは誠に困難であって私にも解決できない。アリストテレスが2300年前既にこの問題をとりあげている。彼はいう「人生の目的は幸福である。幸福については、教養の高い人でも一般の人でも考えは全く同じで、よく生き、よく暮していくことで名目上は一致している。」といっている。

しかし、「幸福とは何か」と問うとき、その内容については皆意見が異なる。一般の人々は快楽とか富とか名誉のような判然としたものをあげる。だが、彼等とて、いつも同じではない。病気をすると健康を、貧乏すると富を、無知であることをさとれば知者を賛美し、知を得ることを善とし幸福とするといひ、人間の実生活には3通り形態があり、そしてそれぞれの形態に応じて幸福の様相が異なるとしている。

第1の生活は享樂的生活で、快楽を善としそれを追求する生活形態で最も低いもので、

動物的生活である。

第2の生活は政治的生活で、名誉を善としそれを追求するもので、人間的生活である。

第3は、観照的生活で、真理深求の生活で神的生活である。

以上の生活形態において、それぞれ満足をした時に幸福を感じ、幸福を得たとする。第1の生活によって得られるものは最も一般的で物質的・肉体的欲求の満足をもって幸福とするものでいわば動物的幸福である。

第2の生活によって得られるものは人間的幸福で社会的活動をし、その職分を果たすことにより得られる名誉をもって満足するものである。

第3の生活によって得られるものは神的幸福で、真理を獲得することをもって満足し、他に何物も求めないもので神と等しく、円満具足、完全であって、これが人間活動の中で最高の幸福である。(注3)

以上はアリストテレスの見解であるが、アリストテレスは「万学の父」と称され、今日の学問の体系の基を開いた人で、真理の探求をもって人間生活の最高目標としたから前述のような幸福観に到達したであろうが、この見解は一般の人々には通用しがたいものである。

幸福論は大きな問題であり、果てしない問題であるからこの辺でとめておく。(注4) アリストテレスは人生の目的は幸福であり、何人も幸福を求めているのだから政治家は特に国民の指導者として幸福を研究しなければいけないといっているが、これはアレキサンダー大王が若くて太子であった時の家庭教師であったのでかく言ったのであろうが、今日でも通用する言である。日本の政治家ばかりでなく、アメリカ、ソビエトその他の国々の政治家も真面目に人類の幸福について研究する必要がある。

III ユーティリタリアニズムは功利主義又は公福主義である

Utilitarianismを「功利主義」と訳するのは前述したことにより全く誤りであることが明らかになったと思われる。従って、正しい訳は「公利主義」又は「公福主義」であって、なるべく多くの人の利益と幸福とを重んずる主義である。否、全人類の幸福をもつて最高目標とする原理である。

しからば、何人がユーティリタリアニズムを「功利主義」と訳し、英米人は功利主義者であるとし、戦時中は特に英米人を鬼畜英米と軽蔑し、道義を知らぬ者という風潮を日本人に植えつけたかを考察してみよう。

ベンサムの倫理思想を日本に最初に導入したのは明治の先覚者西周(1826-94 文政9

注3. ニコマコス倫理学 高田三郎訳参照

注4. 世界の幸福論 山田孝雄編 大明堂昭和54年3月参照

—明治27)である。彼は1862—66の間オランダに留学し政治学・法学を学んだが、ユトレヒト大学の哲学教授オブゾーメルOpzoomer, Cornelis Willem (1821—92)に教をうけてベンサムとミルの実利に基づいた倫理説に大いに興味をもち、帰国後、その思想を根幹として自己の倫理説を立て、明治8年6月に、明六雑誌第38号に「人世三宝説」という論文を発表した。それは「幸福論」である。三宝とは、健康・智識・富有であって、これなくして人間は幸福に生きることができないことを力説したものである。徳川時代に武士階級が金銭を重んじなかったのに対し、富有が幸福の一源泉であることを強調したのは当時としては世人を驚かした新思想であった。

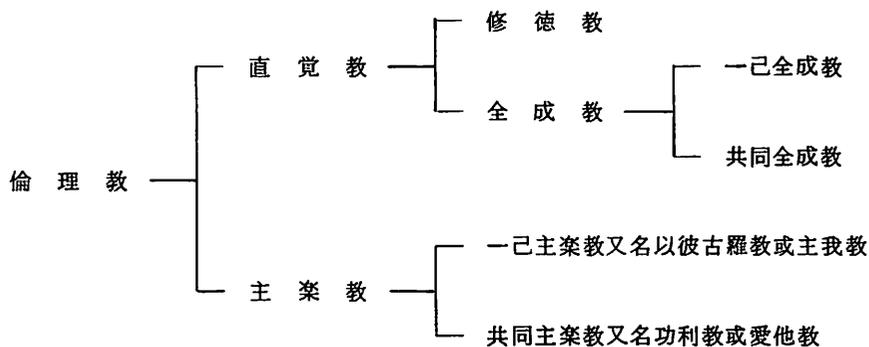
明治10年に西はミル著Utilitarianismを漢訳して「利学」という書名で出版している。序文の一節に「利ヲ大本ト為スノ道徳学ヲ称スル也」と述べている。これは漢文でありあまり読まれなかったものと思われる。

明治13年、渋谷啓蔵という人が同書を和訳し「利用論」という書名で出版している。中村正直が序文を書き「原名ユチリタリアニズム蓋公利幸福ヲ以テ道徳ノ目的トナス所ノ教ヲ謂フ云々」と述べている。

明治16年11月ベンサムのAn introduction to the principles of morals and legislation が陸奥宗光によって日本語に訳され「利学正宗」として出版された。この書名は「道徳及び立法の原理序論」が正訳であるが、ミルのユーティリタリアニズムが「利学」とされたので、彼の師であるベンサムの著作で、しかも「利学」のもとをなす本であるという意味から「利学正宗」という全く原書名と異った書名としたものと思われる。当時は、徳川時代にかく蔑視された「利」を寧ろ重んずべきで、これによって西洋文明に追いつこうとする意図が強かったものと思われる。

丁度この頃、新進学徒である井上哲次郎が日本で最初の倫理学書を世に出した。これは「倫理新説」という書名で明治16年3月出版で63頁の小冊子である。しかし、扉の裏に「吐露卑見以問千古」と大きく書いてあるところより察すればよほど気負っていたように思われる。

井上は同書に、倫理説を体系的に次の如く述べている。



「一己主義教ハ、又以彼古羅教（エピキュリヤニズム）或ハ主我教（イゴイズム）ト名ズケ、共同主義教ハ又功利教（ユーチリチー）或ハ愛他教（アルツルイズム）ト名ツク。其ノ図左ノ如シ。」と云うて前掲の図をあげ、図の後に更に説明を加えて「ヒューム氏ニ至リテ、始メテ功利ノ教アリ。然レドモ末ダ大ニ世ニ行ハレズ。後ペンタム氏起リテ、人生ノ目的ハ功利ニアルヲ説キ、一世ノ耳目ヲ驚カス。其教遂ニ^ミ彌爾ニ至リテ大成セリ。彌爾オモヒラク、幸福ハ人生ノ目的ナリ云々。」と述べている。

以上の井上の説を考察すれば、ユティリタリアニズムとは共同主義であって、最大快楽又は最大幸福を善とするもので、功利教或は愛他教であり、功利とは幸福の獲得の意味であることが明らかである。

これを要するに当時の人々の「利」は人生を利するもの、幸福を増進するものを意味し、功利と幸福とは全意義に用いられていた。井上は漢学の素養の高い学者であったので、功利という訳語を用いたが彼の博学がかえって後世に禍根を残した。

明治17年（1884年）30才の時、井上は文部省からドイツ留学を命ぜられ 23年（1890）までドイツ観念論哲学を研究し、帰国してから東京大学教授となり、文学博士となり、大いにドイツ哲学の普及をはかった。30年東京大学文科大学長となり、また、哲学会会長ともなり、彼の日本の思想界における地位は最高であり、その影響力は偉大なものであった。

彼がユティリタリアニズムをよんだ名称の中で最も不適当と思われる「功利」が語呂のよいためか、分りよいためか、後世の学者にうけつがれ、井上円了が彼の著「倫理学通論」（明治21年発行）の中で「功利教」といい、沢柳政太郎も「倫理書」（明治24年発行）に功利教としている。西田幾多郎が明治44年に著した「善の研究」の第三編第八章倫理学の諸説其四に「公衆的快楽説、即ち、所謂功利教」としてあるが、昭和25年の岩波文庫では「功利説」と改めている。

明治30年6月に発行したミュイアヘッド著桑木巖翼訳「倫理学」ではじめて「功利説」と訳してからその後は「功利説」とよばれるようになり、今日は「功利主義」とも呼ばれるが益々原語の意味から遠ざかったように思われる。

「功利説」に賛成した学者で著名な者は、前述の加藤弘之である。彼は「私は、功利主義が正しいと思うし、かつ好きである」と「道徳法律進化の理」（明治33年4月発行）の中で言明している。さらに、晩年「儒教は功利主義なり」という講演を行ったのが大正5年1月発行の丁酉倫理講演集第161号に掲載されている。彼は、81才でその直後他界したが、井上哲次郎はこれを反駁して同誌166号に「儒教は功利主義に非ず」という論説をのせている。

この頃より、井上は功利主義を次第に攻撃するようになった。もともと儒学を研究し、その方面の深い教養を身につけていた彼が、ドイツ観念論哲学によって一層理想主義を強

めた彼は、利益とか、幸福とかという個人主義的な思想に対して強い嫌悪の情を抱いていたものと思われる。彼のその後の言動は、彼がはじめに「功利」と「愛他」とを同一視していたことを全く忘れ、「功利」といえば自己の利益を主とするとする荀子の思想を意味するものを見るようになった。

大正の末頃に井上がある宗教団体に対し講演を行った時の速記によると次の如く述べている。「西洋の倫理運動も形式から云ふと儒教に似ている。併しながら注意すべきことは実証論理的傾向の運動者は兎角功利主義で行こうとしている。……中略…… 倫理運動は功利主義などと云ふことではとても難しい。……道徳とは功利を超絶した所にあるので、功利以上の理想主義によって道徳というものは始めて行はるるもので、功利的の事も其の理想主義の範囲に入れて始めて道徳に適ふものであって、単に功利主義に依って行くと云ふことだけでは道徳は低級なものたるを免れない。云々」といっている。

ここでいう功利主義は果たして何を意味するのであろうか。彼が「倫理新説」で述べた如く功利を愛他と解するか又は本来の意味の「最大多数の最大幸福」又は「人類の幸福」としたとき、それらは、井上のいう如く果たして低劣な道徳ということができようか。彼は、若い時に学んだことを忘れ、御用学者となり、老いて後は功利主義とは道義を無視した個人の利益本位の悪思想と思いこんでいたようである。

彼のこのような説が、後の学者にそのまま伝っている。

井上について、昭和初期の哲学者紀平正美も同様の言を、彼の著「日本精神」の中で述べている。「近世科学の祖と尊称されるベーコンが英国人であったのみならず、全体として、自然科学の基礎を立て且つ発達せしめたのは英国人であったのである。個人集って社会国家をなす、故に社会国家の目的は、個人生活を豊富にするというより外に目的はない、即ち、簡単には功利説がその道徳上の終局学説となる。云々」

この言に到っては、功利主義を勝手に解釈しているようで、学者の言と見ることはできない。英国の功利説を学んでいない者の言である。

その後の著名な学者も皆軌を一にしている。辻善之助が名著「日本文化史」の第7巻の明治時代編にしばしば「功利主義」の言葉を用いている。「実利的物質文明を要求す。英米の功利主義の採用」とか「福沢は……全体として、功利主義の色彩が著しい」とか又唯物主義、実用主義が功利主義であると述べている。倫理学者でない彼はやむを得ないとして、奇異に感じられることは大倫理学者和辻哲郎が彼の著「日本倫理思想史」下巻の中で福沢諭吉が若い頃、大阪の緒方塾でオランダ語を熱心に勉強したのをほめて「功利主義者である福沢がこのように学問のための学問の立場を認めていたことは、興味ある現象といはなくてはならない。」と述べているが、これは、実利を重んずる福沢を功利主義者と見なし、彼は目的なしに学問のための学問をしたのは立派だとしているが、この場合の功利主義者とはけっしてユーティリタリアンを意味しているものではない。して見れば倫理学者で

さえも「功利」とか「功利主義」といった場合は、英国人の説くユーティリタリアニズムでないのが殆んどである。従って今日功利主義について語られる場合、英国の功利主義を理解し、それを念頭においていないのが一般のようである。

英米派といわれていた長谷川如是閑が、井上哲次郎が東大で大きな勢力をもってドイツの観念哲学を鼓吹し、英米の哲学を駆逐しなかったら日本の社会は今日と異っていたであろうという意味の言葉を私が彼の全集の中から見出して深く感じさせられるところがあった。

英国の伝統的思想であるユーティリタリアニズムを真に理解し、それを実践していたらば或は日華事変等も起らなかったかも知れないと思う。

一学生が私に「日本は何故、社会福祉がおくれているか」と質問したことがあった。私はそれに答えて、英国及び西洋諸国では功利主義思想が普及して、それが実践化されているからだといったが、欧米のすべてとはいえないが功利主義思想がベンサム出世の頃から拡がりつつあったことは明らかである。

今日、日本の憲法や教育基本法の根幹となっている世界平和と人類の福祉の増進の思想は英国功利説の理念と相通するものである。

IV む す び

一度できた「わだち」は後車がそれをかえることはなかなか困難である。特に、それが深い大きいものであれば尚更である。

井上哲次郎という大学者によって曲げて造られた「わだち」は便利でもあり、又、ある意味では分りやすいためにそのまま踏襲され、それが長年月を経て今日に到り、それを改めることが殆んど不可能といって差支ないであろう。

しかし、誤はやはり誤であり、長年月を経た故に邪が正となることはない。私は、いかにこの「わだち」が深く、是正しがたくあっても、これを正さなければならないと思う。もし、ただすことができないにしても 倫理学を研究する者に対して常に注意を喚起して誤りを正させる努力をつづけなければならないと思う。それが私の果たすべき責務と思っている。

(本学教授 倫理学担当)